Rikkyo Psychological Research
2011, Vol. 53, 17-28

原　著

青年期の愛着行動特徴と漸成発達の親密性の達成との関連

立教大学大学院現代心理学研究科　キン イクン

The relationship between adult attachment theory and intimacy development in ego epigenetic

Jin Yijun（Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University）

This study investigates the relationship between adult attachment theory and intimacy development as defined in E. Erikson's theory of ego epigenetic. Through zero-level relationship analysis and Structural Equation Modeling（SEM）, the following hypotheses were verified: (a) Two factors defined in adult attachment theory, anxiety and avoidance, are significantly and negatively correlated with intimacy as defined in the theory of ego epigenetic; (b) Both anxiety and avoidance are significantly and negatively correlated with identity status as defined in identity theory; (c) Gender differences in the model of adult attachment behaviors impact on intimacy: The influence coefficient of anxiety is greater that of avoidance in females, while the reverse is true for males.

Key words : adult attachment, intimacy, ego epigenetic.

問　題

青年期が終わり成人期に至ると，漸成発達の第6段階“親密性　対　孤独”に入り，“親密性”が発達の主題となる（Erikson, 1950, 1963　仁科訳 1977）。これは単に異性と結婚して自分の家庭を持つことだけでなく，親密な仲間関係を作ることも意味している。しかし，人を拒絶したり，距離を設けたりすることや，人との親密関係のため自分自身が巻き込まれて自我の喪失を恐れ不安感を強く感じる場合，親密性の対極である“孤独”に偏ることとなる。この状態に陥ると，自分のことのみに夢中になり本当の親密な関係をつくりあげられなくなる（Erikson, 1959　小此木訳　1973）。

一方，近年同じように青年期の親密関係を主な研究テーマとする成人愛着理論が注目されている。成人愛着理論の基本的な観点は，幼少期において養育者との愛着経験によって形成された内的作業モデルが，青年期や成人期における親密関係にも働いて大きな影響を及ぼすことにある（Shaver & Hazan, 1987）。Bartholomew & Horowitz（1991）は成人愛着行動の特徴をとらえるため，因子分析の結果にもとづいて“不安”と“回避”の2因子構造を見出している。不安と回避の両方が低い場合には，安定型愛着行動特徴であり，反対に不安と回避のどちらか高い場合は不安定型愛着行動傾向があるといえる。不安定型愛着行動の中で，さらに不安因子の得点が高いとらわれ型と回避因子の得点が高い愛着軽視型にわけられる。

先行研究によると，成人愛着行動の特徴と青年期の親密関係については諸方面と関連がある。たとえば，不安定型愛着行動傾向がある人は進行中の恋愛関係についてより不満を感じている（Elizur & Mintzer, 2001; Mohr, 1999; Ridge & Feeney, 1998）。さらに，人格特性，自信，性役割などのような心理的，社会的な要因をコントロー

ルしても，この関連性は依然として有意である（Carnelley, Pietromonaco, & Jaffe, 1994; Jones & Cunningham, 1996; Noftle & Shaver, 2006; Shaver & Brennan, 1992; Whisman & Allan, 1996）。

また，不安定型愛着行動特徴がある人の場合には，恋愛関係を持続する時期がより短く（Hazan & Shaver, 1987），離婚率がより高い（Birnbaum, Orr, Mikulincer, & Florian, 1997; Doherty, Hatfield, Thompso, & Choo, 1994; Feeney & Noller, 1990）。さらにこの問題についての縦断研究の結果においても同じ結論が得られた。すなわち，不安定型愛着行動特徴がある人は恋愛関係においての安定性や持続性が崩れやすい（Duemmler & Kobak, 2001; Kirkpatrick & Hazan, 1994; Shaver & Brennan, 1992）。

Feeney（1996）は恋愛関係における依存感と独立感について研究するため，調査対象者の恋愛の感想に対して内容分析を行った。その結果，愛着軽視型の人は恋愛関係における独立性を強調するのに対して，とらわれ型の人は依存性を重視している。それとは対照的に，安定型の人は依存性と独立性との間のバランスを慎重に取ることが非常に重要だと指摘した。さらに，Treboux, Crowell, & Waters（2004）は恋愛相手に対する関心の程度について検討した。その結果，不安定型の人は相手への関心の程度が低かったが，安定型の人の場合にはこの現象はみられなかった。

また，青年の愛着行動と友人関係との間の関連性を検討した研究もある。安定型愛着行動特徴の人はより仲間を信頼し，自我を開放して積極的に相互作用を進める（Furman, Simon, Shaffe, & Bouchey, 2002; Grabill & Kerns, 2000; Mayseless, 1993）。Black & McCartney（1997）は実験室に仲間との交流と協力場面を作って人間関係の円滑さを観察した。その結果，二人の仲間がみな安定型愛着行動特徴を持つ場合には人間関係が円滑に進むのに対して，二人のうち一人が不安定型愛着行動特徴の人がいると人間関係の円滑さが低下する。

これらの研究結果をまとめると，不安定型の愛着行動特徴は親密関係の達成を妨げ，不安や回避が高いほど親密性が低いと推測される。すなわち，不安も回避も親密性との間に負の相関があると考えられる（仮説 1）。

ところが，Erikson（1968, 岩瀬訳 1973）は他人と本物の親密関係を結ぶことはアイデンティティの確立の結果であり，親密性を獲得するためにはまずアイデンティティを確立しなければならないと指摘した。したがって，青年期の愛着を通して自分のアイデンティティを他者からの評価によって定義付け，補強する“アイデンティティのための恋愛”（大野，1995）という現象も起こる。もしこのような愛着に失敗すると，“自分自身を孤立させ，非常に規格化された形式的な人間関係しか見出さないこととなる”（Erikson, 1959 小此木訳 1973, p.120）。つまり他人を信頼し，不安感が低く，自らが人に接近することができるような安定した愛着行動特徴はアイデンティティの確立を促進するとともに，アイデンティティ確立の程度が高いほど，自分自身を信じて他人と本物の“かかわりあい”を結ぶこともできる。そこで青年期の愛着行動における不安と回避は，アイデンティティ確立の程度との間に負の相関があると考えられる（仮説 2）。

さらに，Davila & Bradbury（2001）は 4 年間にわたって 172 組の新婚夫婦に対して縦断研究を行った。その結果，調査参加者の結婚前の愛着行動特徴が結婚後の生活満足感，不愉快感や離婚可能性などを予測できることが示された。しかもこの結果は他の縦断研究で得られた結論と一致している（Cobb, Davila, & Bradbury, 2001; Feeney, Noller, & Callan, 1994; Klohnen & Bera, 1998）。これらの縦断研究は，成人愛着行動特徴から成人期の親密関係の形成と維持に影響を与えることを示した。ところが，Collins & Read（1990）によると，カップルにおいてとらわれ型の女性と愛着軽視型の男性がいれば，男性の方は恋愛関係に対してより多くの不満感を抱く。Kirkpatrick & Davis（1994）の縦断研究においても，とらわれ型女性の恋愛相手と愛着軽視型男性の恋愛相手は，恋愛

関係についてよりネガティブに評価することが示され，同様の結果はSimpson（1990）の研究においても明らかにされている。

これらの研究結果から，女性の不安と男性の回避という愛着行動特徴は，親密関係に強く影響を及ぼすことが推測される。つまり青年期の愛着行動特徴と成人期の親密性の因果モデルにおいて，女性の場合には不安が回避より親密性に影響するのに対して，男性の場合には回避が不安より親密性に影響を与えると考えられる（仮説3）。

方　法

調査参加者

首都圏4年制私立大学の大学生229名のうち，質問項目“あなたは，過去又は現在において恋愛経験があるか？”に対して“ある”と答えた172名（男性64名, 女性108名）を分析対象とした(性別不詳の1名は分析から除外した)。

調査内容

ECR-R（Revised Experiences in Close Relationships）**尺度日本語版**　この尺度は英語版（Fraley, Waller, & Brennan, 2000）から，英語に堪能な心理学専攻大学院生3人と青年心理学専門の研究科教員1名によって共同で翻訳したものである。英語版尺度は高い信頼性と妥当性があることが既に実証されている（Fraley, Waller & Brennan, 2000; Sibely, Fischer & Liu, 2005）。本尺度は不安と回避の2つの下位尺度で構成されている。不安下位尺度は18項目(例えば,“彼／彼女に愛されなくなってしまうのではないかと心配になる”)，回避下位尺度は18項目（例えば，“彼・彼女は私が怒っているときにだけ，私に関心を向けるようにみえる”）であり，7段階評定によって回答を求める。得点が高ければ不安あるいは回避傾向が高いことを示している。

アイデンティティ・親密性尺度　本尺度はS-ESDS質問紙（三好・大野　久・内島・若原・大野千里，2003）からアイデンティティ確立と親密性に応じた項目を抽出して再構成したものである。S-ESDS質問紙はOchse & Plug（1986）がErikson, E. H. の漸成発達理論に基づいて作成した英語版質問紙の日本語短縮版で，信頼性，妥当性ともに高い質問紙である。本尺度は，アイデンティティ確立を測定する7項目（例えば，“自分の人生において，すべきことがはっきりわかっている”）と, 親密性を測定する7項目（例えば,“私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる”）の合計14項目からなっており，4段階評定によって回答を求める。得点が高ければアイデンティティ確立あるいは親密性が高いことを示している。

手続き

2008年5月から6月にかけて大学において授業時間を利用して質問紙調査を実施した。

結　果

ECR-R尺度の信頼性と妥当性

ECR-R尺度の信頼係数を算出した結果，不安尺度はα=.86，回避尺度はα=.86と高い値が得られた。探索的因子分析を行い（Table 1），因子負荷量が.40に満たない項目は削除した。その結果，プロマックス回転後の不安因子における14項目の因子負荷量は.75—.40であり，回避因子における13項目の因子負荷量は.70—.43となった。さらに，ECR-R尺度の妥当性について検討を加えるため，確認的因子分析を行い，モデル適合度は満足できるものであった（$\chi^2(8, N=172)=7.38$, *n.s.*; GFI=.98, CFI=.97, RMSEA=.001）。なお，因子間相関係数はr =.17（*n.s.*）だった。これらの分析結果から，ECR-R尺度は適度な信頼性と妥当性を持つことが示された。

アイデンティティ・親密性尺度の信頼性と妥当性

アイデンティティを測定する7項目の信頼性係数はα=.70，親密性を測定する7項目の信頼係数はα=.75と適当な値が得られた。主成分分析の結

Table 1
ECR-R 尺度の各項目の因子負荷量

項　目　内　容	因子 Ⅰ. 不安	因子 Ⅱ. 回避
私は彼／彼女が私といっしょに居（い）たくないのではないかとよく心配になる。	**.75**	.01
彼／彼女に自分の愛情を表しても，相手が同じように私を好きと思ってはくれないかもしれないと思う。	**.72**	-.03
私は，彼／彼女が私のことを実際には愛していないのではないかとよく心配する。	**.71**	-.02
彼／彼女に愛されなくなってしまうのではないかと心配になる。	**.70**	-.13
私が彼／彼女のことを考えているほど，彼／彼女が私のことを考えていないような気がする。	**.07**	-.15
彼／彼女と離れていると，私は彼／彼女が誰か他の人に関心をもつようになるかもしれないと心配する。	**.60**	-.17
彼／彼女が原因で私は疑い深くなってしまう。	**.53**	-.05
私は彼／彼女に捨てられることをほとんど心配しない。*	**.51**	.06
私は自分が他人にかなわないのではないかと心配する。	**.49**	.18
彼／彼女は私が望むほどは親密になりたくないようだ。	**.46**	.20
しばしば，私が想っている程強く，彼／彼女が私のことを好きでいて欲しいと思う。	**.45**	-.22
一旦彼／彼女が私の本当のことを分かってしまうと、私のことを好きではなくなるのではないかと思う。	**.44**	.10
私は彼／彼女と別れることをめったに心配しない。*	**.41**	.02
私が必要とする愛情と支え（サポート）を彼／彼女から得られないことは私を苛立たせる。	**.40**	-.12
私は自分の人間関係でとても悩んでいる。	.37	-.01
彼／彼女は私が怒っているときにだけ，私に関心を向けるようにみえる。	.32	.19
時々，彼／彼女ははっきりした理由もないのに私に対する感情を変える。	.30	.13
非常に親密になりたいという私の願望は，ときどき人を怖がらせる。	.29	.03
とても困っている時彼／彼女に頼ることは私にとって助けになる。*	-.07	**.70**
彼／彼女に頼ることは心地よい。*	-.20	**.70**
私は彼／彼女に対して心を開くことを心地よく思わない。	-.12	**.65**
私は彼／彼女と色々な事を話し合う。*	.08	**.65**
私はどんな事でも彼／彼女に話す。*	.03	**.59**
私は彼／彼女に頼ることができない。	.11	**.58**
私にとって彼／彼女に頼ることは気安いことだと思う。*	.00	**.58**
私は、普段から彼／彼女と私の悩み事と関心事についてよく話し合う。*	.16	**.56**
彼／彼女と親密になることは私にとってとても心地よい。*	-.11	**.55**
私は彼／彼女とあまりにも親密になりたくない。	-.02	**.55**
彼／彼女は，私のことや私の必要としていることを本当に理解している。*	.17	**.48**
彼／彼女がすごく近づこうとすると気詰まりになる。	-.06	**.45**
自分のプライベートな考えや感情を彼／彼女と共有できると安心だ。*	-.29	**.43**
彼／彼女に近づくことは，私にとって割と気安いことだ。*	.32	.35
彼／彼女と親密になることは私にとって難しいことではない。*	.40	.33
私は自分が心の底でどのように感じているかを彼氏／彼女に見せたくない。	.19	.32
私にとって、彼／彼女に優しくすることはたやすいことだ。*	.04	.30
彼／彼女が私に近づいてくると緊張する。	.37	.22
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	−	.17
Ⅱ		−

注）* 印がある項目は逆転項目。

果，アイデンティティ下位尺度の各項目の主成分得点は .71—.32 であり，親密性下位尺度の各項目の主成分負荷量は .75—.50 であった（Table 2）。これらの分析結果によって本尺度の信頼性と妥当性が示された。

基本統計量

ECR-R 尺度とアイデンティティ・親密性尺度

Table 2
アイデンティティ・親密性尺度における下位尺度の主成分分析の結果

項　目　内　容	主成分得点	共通性
アイデンティティ尺度		
私は，のけ者にされているように感じる。*	0.71	0.50
私は，私であることに誇りを感じている。	0.68	0.47
人生に望むものが定まらない。*	0.68	0.46
私のことを人がどう思っているか，よくわからない。*	0.68	0.46
私って本当はどんな人間なのかわからない。*	0.59	0.35
私は，自分に合った生き方をしていると思う。	0.46	0.21
私はいつも演技したり，見せかけの行動をしているように思う。*	0.32	0.11
親密性尺度		
私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。	0.75	0.56
誰も私のことなど本当には気遣ってくれないと思う。*	0.72	0.52
本当の私のことを理解してくれた人なんて，これまで誰もいない。*	0.67	0.49
素で（飾らないで）付き合える相手がいる。	0.67	0.45
私はこの世の中で，ひとりぼっちのように感じる。*	0.61	0.37
私は人とプライベートなことを話すことがある。	0.50	0.25
人に自分のことをさらけ出すと，不安になることがある。*	0.50	0.25

注）* 印がある項目は逆転項目。

Table 3
アイデンティティ・親密性尺度の基本記述統計量

	男　性（*N*=64）		女　性（*N*=108）		
	平均値	（標準偏差）	平均値	（標準偏差）	*t* 値
ECR-R					
不安	72.89	-17.04	74.62	-15.27	0.74
回避	60.22	-13.79	60.08	-16.33	0.07
S-ESDS					
アイデンティティ	17.45	-3.83	17.58	-3.76	0.24
親密性	21.04	-4.21	21.46	-4.04	0.87

の下位尺度の平均値，標準偏差を算出した（Table 3）。*t* 検定の結果，各下位尺度において男女の間に有意な差異はみられなかった。

ECR-R 尺度とアイデンティティ・親密性尺度との相関

青年の愛着行動の特徴と漸成発達の親密性との関連について検討するため，ECR-R 尺度における不安と回避の下位尺度とアイデンティティ・親密性尺度におけるアイデンティティ確立，親密性との相関係数を男女別に算出した（Table 4）。男性の場合，親密性は不安との間に $r = -.51$（$p < .01$），回避との間に $r = -.45$（$p < .01$）という有意な相関があった。一方女性の場合，親密性と不安との相関が $r = -.52$（$p < .01$）であり，男性の値に近かったが，回避との相関が $r = -.27$（$p < .01$）であり男性より低かった。しかし男女とも不安と回避は親密性との間に有意な負の相関を示し仮説 1 が支持された。また，アイデンティティ確立と青年の愛着行動の特徴との関連について，男性の場合，アイデンティティ確立と不安との相関は $r = -.57$（$p < .01$），回避との相関は $r = -.53$（$p < .01$）だった。それに対して女性の場合，アイデンティティ確立と不安との相関は $r = -.52$（$p < .01$），回避との相関は $r = -.37$（$p < .01$）だった。したがって，男女ともにアイデンティティ

Table 4
ECR-R 尺度とアイデンティティ達成・親密性尺度との相関関係（男女別）

	1	2	3	4
1. 不安		.31**	− .52**	− .37**
2. 回避	.16		− .37**	− .27**
3. アイデンティティ達成	− .57**	− .53**		.70**
4. 親密性	− .51**	− .45**	.60**	

注）行列上三角部は女性（*N*=108）の結果，下三角部は男性（*N*=64）の結果。　*p <.05, **p <.01

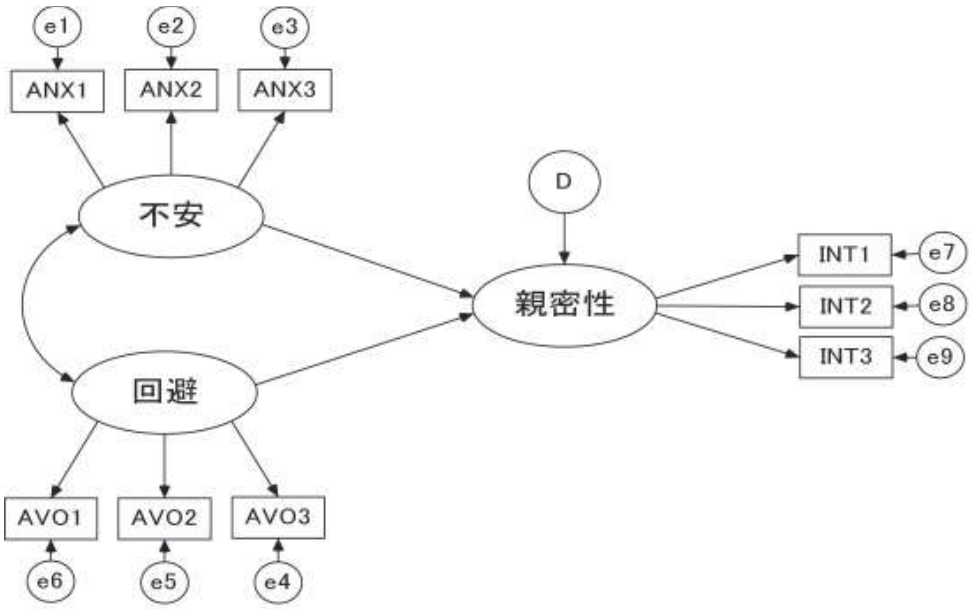

Figure 1.　成人愛着行動特徴から親密性への因果モデル

確立と不安，回避との間には負の相関があり，仮説 2 が支持された。

ちなみに，男女いずれの場合にも，アイデンティティ確立と親密性の間に有意な正の相関を示している（男性 r =.60, p <.01; 女性 r =.70, p <.01）。この結果はアイデンティティを確立することにより，その次の段階にある親密性の形成が促進されるという漸成発達理論を支持するものである。

さらに，青年期の愛着行動の特徴と親密性との関係をより深く検討するために，因果モデルを構成し，共分散構造分析を行って男女別にモデルの適合度とパス係数を求めた（Figure 1）。ここでモデルを簡略化するために，Byrne（2001）に推薦された方法を採用した。すなわち，モデルにある ANX 1 は“不安”因子における因子負荷量のもっとも高い変数ともっとも低い変数の得点を合計したものとなり，ANX 2 は次に高い変数と低い変数の得点を合計したもの，ANX 3 はその次に高い変数と低い変数の得点を合計したものである。それ以外の中程度の因子負荷量である変数は除外している。AVO 1—3，INT 1—3 も同様の処置を施した。

分析結果は，男性の場合に，モデル適合度は χ^2(24, *N*=64)=20.09, *n.s.*; GFI=.94, CFI=1.00, RMSEA=.00 である。不安から親密性へのパス係数が − .26 で有意ではないのに対して，回避から親密性へのパス係数は − .70 という高い値で有意だった。さらにパス係数 α_1 と α_2 の差を検定した結

Table 5
Figure 1 のモデル適合度と構成概念間のパス係数

		男性（*N*=64）	女性（*N*=108）
モデル適合度	χ^2	20.09	36.83
	df	24	24
	p	.69	.05
	GFI	.94	.94
	CFI	1.00	.96
	RMSEA	.00	.04
構成概念間のパス係数	α_1	-.26	-.40*
	α_2	-.70**	-.16
	α_3	.45*	.38*
	α_1 と α_2 の差の検定値	-2.02*	1.72†

注）1）† *p*<.10, * *p*<.05, ** *p*<.01
2）構成概念と観測変数の間のパス係数はすべて 5% 水準で有意である。
3）パス係数は標準化されている値を用いた。

果は 2.02（*p* <.05）で，回避から親密性に与える影響は不安からのより強いことが分かった。一方女性の場合は，モデル適合度は χ^2（24, *N*=108）=36.83, *n.s.*; GFI=.94, CFI=.96, RMSEA=.04 である。不安から親密性へのパス係数が－ .40 で有意だったのに対して，回避から親密性へのパス係数が－ .16 で有意ではなくなった。さらにパス係数 α_1 と α_2 の差を検定した結果は 1.72（*p* <.10）で，不安から親密性に与える影響は回避からのより強いことが分かった（Table 5）。すなわち，これらの結果による男女両方とも仮説 3 を支持した。

考　察

本研究では，青年期における愛着行動の特徴と漸成発達理論における親密性の関係について検討した。まず，不安定な愛着行動特徴は親密関係の達成を妨げ，不安や回避が高いほど親密性が低いと推測し，“不安も回避も親密性との間に負の相関がある”という仮説 1 を検討した。相関分析の結果により仮説 1 が支持された。男性の場合，親密性は不安との間に *r* = － .51（*p* <.01），回避との間に *r* = － .45（*p* <.01）の有意な相関があった。女性の場合，親密性は不安との間の相関が *r* = － .52（*p* <.01）であり, 回避との相関が *r* = － .27（*p* <.01）だった。すなわち，男女ともに青年期の愛着行動において不安あるいは回避傾向が強い人は漸成発達における親密性の発達も困難になることが明らかになった。

漸成発達理論によって親密性とは二つの側面から構成される。一つは他者との親密さであり，もう一つは自分自身との親密さである（Erikson, 1959　小此木　1973）。前者は他人を信頼して接近するか，それとも他人の存在は自分にとって危険なものだと警戒して距離を置くかといった人間関係における態度や能力とかかわっており，外部指向の側面である。一方後者は，自分自身を信頼することができるか，自分は人に愛される価値があるのかといった親密関係の中で自我を失う恐れのないような自己指向の側面である。しかし，この二つの側面は相互に独立しているわけではない。対人関係を通して自我像を確立し，より自分を信ずるとともに，自信が高まるため，さらに他人と親密に付き合うことができるようになる。すなわちこの二つの側面が互いに相互作用することは，親密性を十分に達成させる不可欠な条件だと考えられる。

一方，成人愛着行動に関する先行研究の結果によると，回避型の人は冷たい態度をとり，不信感が高く，情緒的反応が少ないといった対人行動特徴がある（Guerrero, 1996; Le Poire, Shepard, &

Duggan, 1999; Tucker & Anders, 1998）。不安型の人は自己評価が低く，一人で生活する能力に疑いを持ち自信がないため，相手に過度に依存したり，迎合したり，逆に相手をコントロールしたりする傾向がある（Bartholomew & Horowitz, 1991; Bookwala & Zdaniuk, 1998; Chen & Bradburg,1999; Davila & Bradburg, 2001）。ところが安定な愛着行動特徴の人は他人に対する信頼感が高く（Collins & Read, 1990），対人活動能力がより備わっている（Noller, 2005; Schachner, Shaver, & Mikulincer, 2005）。それゆえ，愛着行動における不安は，漸成発達における親密性の自己指向――自分自身との親密さの形成を妨げ，回避は親密性の外部指向――対人関係へネガティブな影響を及ぼすと考えられる。つまり本研究では，青年期の愛着行動における不安あるいは回避は，親密性の発達を妨げることを明らかにした。

次に，“青年期の愛着行動における不安と回避は，アイデンティティ確立の程度との間に負の相関がある”という仮説 2 について検討した。Table 4 に示されたように，男性の場合にはアイデンティティ確立と不安との間の相関は $r = -.57$（$p<.01$），回避との相関は $r = -.53$（$p<.01$）であった。それに対して女性の場合，アイデンティティ確立と不安との間の相関は $r = -.52$（$p<.01$），回避との相関は $r = -.37$（$p<.01$）であった。男女いずれも愛着行動における不安と回避は，アイデンティティ確立の程度との間に有意な負の相関を示し，仮説 2 が支持された。

漸成発達理論によると，青年期における愛着はアイデンティティの感覚を確立させ，次の段階の親密性を達成するための一つの試みでもある。アイデンティティの感覚とは，要するに“自覚，自信，自尊心，責任感，使命感”である（大野，2010）。ところが，これらの心理要素は愛着行動特徴とも緊密に関連している。たとえば，安定型愛着行動特徴を持つ人は自信が高く（Feeney & Noller, 1990; Kobak & Sceery, 1988; Lopez & Gormley, 2002），自尊心も高い（Bylsma, Cozzarelli, & Summer, 1997; Collins,& Read, 1990; Feeney & Noller, 1990）。さらに人間関係において責任感が強い（Sörensen, Webster, & Roggman, 2002）。すなわち，アイデンティティの感覚を確立するとともに，青年期の愛着行動において，安定した行動特徴がより多く現れることとなる。このような関連の原因については，漸成発達理論も成人愛着理論も，すべては人生の初期段階における信頼感の獲得が人間発達にとってもっとも重要な基礎であることを認めている。

Fonagy（2001, 遠藤・北山訳　2008）は信頼感の経験の由来，信頼感の失敗（不信感の形成），心的表象の整合一貫性，母親の感受性と相互同期性から論証して，漸成発達理論と愛着理論とは理論上，最も近いものであることを指摘している。人生の初期段階で形成された信頼感は青年期とそれ以降においての人格発達にも影響を及ぼすと同時に，愛着行動における“内的作業モデル”の形成にも大きな要因として左右している。このため，信頼感を十分に獲得した人は青年期に至り，アイデンティティの確立が順調に進む。しかも信頼感の獲得過程によって得られた良い経験は，“内的作業モデル”に安定な愛着意識を植付け，成人期になると安定な愛着行動特徴を持つようになる。最後に“青年期の愛着行動特徴と成人期の親密性達成の因果モデルにおいて，女性の場合には不安が回避よりも親密性の達成に影響するのに対して，男性の場合には回避が不安よりも親密性の達成に影響を与える”という仮説を検討した。Table 5 の共分散構造分析の結果によると男性の場合は，不安から親密性へのパス係数 $\alpha_1 = -.26$ で有意ではないのに対して，回避から親密性へのパス係数 $\alpha_2 = -.70$ で有意であり，しかも α_1 と α_2 の差の検定の結果は 2.02（$p<.05$）であった。一方女性の場合は，不安からと親密性へのパス係数が $\alpha_1 = -.40$ で有意だったのに対して，回避から親密性へのパス係数が $\alpha_2 = -.16$ で有意ではなく，しかも α_1 と α_2 の差の検定の結果は 1.72（$p<.10$）であった。これらの分析結果は仮説 3 を支持した。すなわち，男性の方は愛着行動における回避は主に親密性の達成に影響するのに対して，女性の方

は逆に不安が親密性の達成により影響を与えていることが明らかになった。理由としては，まず女性は社会的性役割や経済生活における不平等が原因となり，男性に比べて感情的，心理的依存度が相対的に強い（Montgomery & Sorrell, 1998）。このため，依存してくる相手をふるか，自分が捨てられてしまうかのような恐れによって，不安を感じやすい傾向がある（Mikulincer & Shaver, 2007）。また女性は，人間関係の中で自我の感覚を確立するという特徴があるので，それを維持するために，人間関係に対して高い敏感性が要求される（Surrey, 1991）。このような高い敏感性の形成によって，女性は青年期の愛着において不安も感じやすい。これらの不安こそ女性の親密性の達成を妨げるのではないだろうか。

一方男性の場合には，“理性”，“独立”のような社会的性役割が要求され，感情に左右されないことが求められるため，親密関係においても相対的に独立して，相手から親密を求められることを回避する。この傾向によって親密性の達成にネガティブな影響を及ぼすと考えられる。さらに男性の場合は，他者からの心理的離乳と自我概念の形成とが結びついており，独立性を保持することが重要である（Hatfield, 1982）。しかし青年期の男性は独立性を求めるため，人間関係において距離を過度に設けたり，人の接近を拒絶したりして，結果的に親密性の対極である“孤独”に偏る可能性もあるだろう。

本研究では青年期の愛着行動特徴と漸成発達における親密性の達成に関して検討した。しかし，今後検討すべき問題が残されている。一つは，本研究においてアイデンティティ達成状況と青年期の愛着行動特徴との間に相関関係があることを明らかにしたが，Erikson, E. H によって強調された因果関係についてはまだ検討されていない。もう一つは青年期の愛着行動が親密性の達成に影響するメカニズムを明確にするため，今後はこの点に関して縦断研究により，さらに深く検討する必要がある。

引用文献

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M.（1991）. Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226–244.

Birnbaum, G. E., Orr, I., Mikulincer, M., & Florian, V.（1997）. When marriage breaks up: Does attachment style contribute to coping and mental health? *Journal of Social and Personal Relationships*, **14**, 643–654.

Black, K. A., & McCartney, K.（1997）. Adolescent females' security with parents predicts the quality of peer interactions. *Social Development*, **6**, 91–110.

Bookwala, J., & Zdaniuk, B.（1998）. Adult attachment styles and aggressive behavior within dating relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **15**, 175–190.

Bylsma, W. H., Cozzarelli, C., & Sumer, N.（1997）. Relation between adult attachment styles and-global self-esteem. *Basic and Applied Social Psychology*, **19**, 1–16.

Byrne, B. M.（2001）. *Structural equation modeling with Amos: Basic concepts, applications, and programming*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Carnelley, K. B., Pietromonaco, P. R., & Jaffe, K.（1994）. Depression, working models of others, and relationship functioning. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 127–140.

Chen, M., & Bargh, J. A.（1999）. Consequences of automatic evaluation: Immediate behavioral predispositions to approach or avoid the stimulus. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 215–224.

Cobb, R. J., Davila, J., & Bradbury, T. N.（2001）. Attachment security and marital satisfaction: The role of positive perceptions and social support. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1131–1143.

Collins, N. L., & Read, S. J.（1990）. Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644-663.

Davila, J., & Bradbury, T. N.（2001）. Attachment insecurity and the distinction between unhappy spouses who do and do not divorce. *Journal of Family Psychology*, **15**, 371–393.

Doherty, R. W., Hatfield, E., Thompson, K., & Choo, P.（1994）. Cultural and ethnic influences on love and attachment. *Personal Relationships*, **1**, 391–398.

Duemmler, S. L., & Kobak, R.（2001）. The development of commitment and attachment in dating relationships: Attachment security as relationship construct. *Journal of Adolescence*, **24**, 401–415.

Elizur, Y., & Mintzer, A.（2001）. A framework for the formation of gay male identity: Processes associated with adult attachment style and support from family and friends. *Archives of Sexual Behavior*, **30**, 143–167.

Erikson, E.H.（1950, 1963）. *Child and society.* New York: Norton.
（エリクソン , E. H. 仁科弥生（訳）（1977）. 幼児期と社会　みすず書房）

Erikson, E. H.（1959）. *Identity and the life cycle: Selected papers*. International University Press, Inc.
（エリクソン , E. H. 小此木啓吾（訳）（1973）. 自我同一性　誠信書房）

Erikson, E. H.（1968）*Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
（エリクソン , E. H. 岩瀬庸理（訳）（1973）. アイテンディディ――青年と危機――　金沢文庫）

Feeney, J. A.（1996）. Attachment, caregiving, and marital satisfaction. *Personal Relationships*, **3**, 401–416.

Feeney, J. A., & Noller, P.（1990）. Attachment style as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 281–291.

Feeney, J. A., Noller, P., & Callan, V. J.（1994）. Attachment style, communication, and satisfaction in the early years of marriage. In K. Bartholomew & D. Perlman（Eds.）, *Advances in personal relationships: Attachment processes in adulthood* . Vol.5, London: Jessica Kingsley, pp. 269–308.

Fonagy, P.（2001）. *Attachment theory and psychoanalysis.* New York: Other Press.
（フォナギー , P. 遠藤利彦・北山　修（訳）（2008）. 愛着理論と精神分析　誠信書房）

Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A.（2000）. An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 350–365.

Furman, W., Simon, V. A., Shaffer, L., & Bouchey, H. A.（2002）. Adolescents' working models and styles for relationships with parents, friends, and romantic partners. *Child Development*, **73**, 241–255.

Grabill, C. M., & Kerns, K. A.（2000）. Attachment style and intimacy in friendship. *Personal Relationships*, **7**, 363–378.

Guerrero, L. K.（1996）. Attachment-style differences in intimacy and involvement: A test of the four-category model. *Communication Monographs*, **63**, 269–292.

Hatfield, E.（1982）. What do women and men want from love and sex? In E. R. Allgeier & N. B. McCormick（Eds.）, *Changing boundaries: Gender roles and sexual behavior,* Palo Alto, CA: Mayfield Publishing, pp.106-134.

Hazan, C., & Shaver, P. R.（1987）. Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511–524.

Jones, J. T., & Cunningham, J. D.（1996）. Attachment styles and other predictors of relationship satisfaction in dating couples. *Personal Relationships*, **3**, 387–399.

Kirkpatrick, L. A., & Davis, K. E.（1994）. Attachment style, gender, and relationship stability: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 502–512.

Kirkpatrick, L. A., & Hazan, C.（1994）. Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, **1**, 123–142.

Klohnen, E. C., & Bera, S.（1998）. Behavioral and experiential patterns of avoidantly and securely attached women across adulthood: A 31-year longitudinal perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 211–223.

Kobak, R., & Sceery, A.（1988）. Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, **59**, 135–146.

Le Poire, B. A., Shepard, C., & Duggan, A.（1999）. Nonverbal involvement, expressiveness, and pleasantness as predicted by parental and partner attachment style. *Communication Monographs*, **66**, 293–311.

Lopez, F. G., & Gormley, B.（2002）. Stability and change in adult attachment style over the first-year college transition: Relations to self-confidence, coping, and distress patterns. *Journal of Counseling Psychology*, **49**, 355–364.

Mayseless, O.（1993）. Gifted adolescents and intimacy in close same-sex friendships. *Journal of Youth and Adolescence*, **22**, 135–146.

Mikulincer, M., & Shaver, P. R.（2007）. Contributions of attachment theory and research to motivation science. In J. Shah & W. Gardner（Eds.）, *Handbook of motivation science*. New York: Guilford Press, pp. 201–216.

三好昭子・大野　久・内島香絵・若原まどか・大野千里（2003）. Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版（S-ESDS）作成の試み　立教大学心理学研究，**45**, 65-76.
（Miyoshi, A., Ono, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C.（2003）. The development of a simplified version of Ochse & Plug's Erikson and Social-Desirability Scale（S-ESDS）. *Rikkyo Psychological Research*, **45**, 65-76.）

Mohr, J. J.（1999）. Same-sex romantic attachment. In J. Cassidy & P. R. Shaver（Eds.）, *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. New York: Guilford Press. pp. 378–394.

Montgomery, M. J., & Sorrell, G. T.（1998）. Love and dating experience in early and middle adolescence: Grade and gender comparisons. *Journal of Adolescence*, **21**, 677–689.

Noftle, E. E., & Shaver, P. R.（2006）. Attachment dimensions and the Big Five personality traits: Associations and comparative ability to predict relationship quality. *Journal of Research in Personality*, **40**, 179–208.

Noller, P.（2005）. Attachment insecurity as a filter in the decoding and encoding of nonverbal behavior in close relationships. *Journal of Nonverbal Behavior*, **29**, 171–176.

Ochse, R., & Plug, C.（1986）. Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1240-1252.

大野　久（1995）. 青年期の自己意識と生き方　講座生涯発達心理学 4　自己への問い直し青年期　金子書房　pp. 89-123.
（Ono, H.）

大野　久（編著）（2010）. シリーズ生涯発達心理学 4 エピソードでつかむ青年心理学　ミネルヴァ書房
（Ono, H.）

Ridge, S. R., & Feeney, J. A.（1998）. Relationship history and relationship attitudes in gay males and lesbians: Attachment style and gender differences. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, **32**, 848–859.

Schachner, D. A., Shaver, P. R., & Mikulincer, M.（2005）. Patterns of nonverbal behavior and sensitivity in the context of attachment relationships. *Journal of Nonverbal Behavior*, **29**, 141–169.

Shaver, P. R., & Brennan, K. A.（1992）. Attachment styles and the "Big Five" personality traits: Their connections with each other and with romantic relationship outcomes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 536–545.

Shaver, P., & Hazan, C.（1987）. Being lonely, falling in love: Perspectives from attachment theory. Special Issue: Loneliness: Theory, research, and applications. *Journal of Social Behavior and Personality*, **2**, 105–124.

Sibley, C. G., Fischer, R., & Liu, J. H.（2005）. Reliability and validity of the revised Experiences in Close Relationships（ECR-R）self-report measure of adult romantic attachment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1524–1536.

Simpson, J. A.（1990）. Influence of attachment styles on romantic relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 971-980.

Sörensen, S., Webster, J. D., & Roggman, L. A.（2002）. Adult attachment and preparing to provide care for older relatives. *Attachment and Human Development*, **4**, 84–106.

Surrey, J. L.（1991）. The "self-in-relation": A theory of women's development. In J. V. Jordan., A. G. Kaplan, J. B. Miller, I. P. Stiver & J. L. Surrey（Eds.）, *Women's growth in connection: Writings from the Stone Center*. New York: Guilford Press. pp. 51-66.

Treboux, D., Crowell, J. A., & Waters, E.（2004）. When "new" meets "old": Configurations of adult attachment representations and their implications for marital functioning. *Developmental Psychology*, **40**, 295–314.

Tucker, J. S., & Anders, S. L.（1998）. Adult attachment style and nonverbal closeness in dating couples. *Journal of Nonverbal Behavior*, **22**, 109–124.

Whisman, M. A., & Allan, L. E.（1996）. Attachment and social cognition theories of romantic relationships: Convergent or complementary perspectives? *Journal of Social and Personal Relationships*, **13**, 263–278.

——2010.10.4 受稿 , 2010.12.14 受理——